

博士学位請求論文審査報告書

請求者氏名 山本智子
学位の種類 博士（文学）
論文の題目 中世東濃窯の研究

1. 論文の視角と研究史上の特色

山本智子氏の学位請求論文は、岐阜県多治見市・可児市・土岐市を中心に 12 世紀初頭から 15 世紀後葉にかけて展開した、中世東濃窯に関する考古学研究である。

窯跡（窯業遺跡）の研究は、戦後の歴史考古学における研究分野の一つで、現在では単に遺物（陶磁器）の研究に留まらず、遺構・遺跡を分類・分析を通して生業としての窯業の歴史を解明することを目的とする。とはいえ考古学的研究の基本は遺物の編年研究であり、窯跡の出土遺物は一括性が高いため編年研究にとって打って付けの材料を提供してきた。これは東濃窯ばかりでなく各窯業地においても同様で、まずは出土遺物の詳細な編年の確立が必要で、それを基にして窯体構造の変遷、窯跡の分布や群構造といった、生産地ならではの研究が可能となる。加えて、最近では消費地における調査の成果から、製品の流通圏や流通経路を検討することで、各窯業地の生産と流通の実態に迫ることができる。

これまでのところ、東海地方には 30 カ所で中世窯の存在が確認されている。このうち多くの窯業地では概ね 13 世紀代に廃絶しているが、瀬戸窯・常滑窯・東濃窯の 3 窯業地では、中世全般を通じて生産が行われた。しかし瀬戸窯では高級施釉陶器を、常滑窯では大形壺甕類（貯蔵具）や片口鉢類（調理具）を生産し、いずれも日本全国の中世遺跡から出土している。それに対して東濃窯では、山茶碗類（供膳具）が中心に生産されるが 15 世紀後葉に廃絶してしまう。瀬戸窯や常滑窯とは生産体制が異なることは明らかである。

山本智子氏の学位請求論文「中世東濃窯の研究」は、A4 縦版、全 141 頁（本文は横書き 46 字×41 行、うち図表約 70 頁）である。美濃国最大の窯業地であった中世東濃窯に関するもので、山本氏は本学大学院に入学以来この研究に取り組んでおり、これまでの研究の集大成といえるものである。なお、本論文掲載の遺物実測図の大半は山本氏自身が作図したもので、図表の多くは山本氏の作成である。

2. 論文の構成と要旨

山本智子氏の学位請求論文は、六つの章から構成されている。以下、章ごとに内容をみていきたい。第 1 章「中世東濃窯の編年研究史」では、中世東濃窯を現多治見市・土岐市・可児市に加え瀬戸市北部・犬山市及び春日井市の一部に分布する窯跡群と地理的範囲を規定し、第 1 節から第 3 節では、東濃窯の考古学的研究の草分けである田口昭二氏をはじめ、山本氏自らの研究を含めてこれまでの中世東濃窯の編年研究史を纏めている。すなわち、12 世紀前半から 15 世紀後葉にかけて東濃窯の主要生産器種である山茶碗類と、12 世紀後半から 13 世紀前葉にかけて東濃窯の一部で生産された

四耳壺・瓶子・水注など小形壺瓶類について、従来の編年研究を纏めている。そして第4節では編年研究上の問題点として、①15世紀代に位置付けられる大洞東期（第10型式期）と脇之島期（第11型式期古）は時期差であるのか併行するのか、②窯道具の蓋に記された「文永三年（1266）」銘は、白土原期（第6型式期）か明和期（第7型式期）に属するかの2点を挙げている。

第2章「中世東濃窯の編年」は、山本氏に拠る中世東濃窯製品の最新の編年研究である。第1節は主要器種である山茶碗類の編年研究で、従来の編年と異なる点は、①無高台碗（碗Ⅱ類）の出現は意外に古く第4b型式期（12世紀第3四半期）まで遡り、最末期の第11b型式期（15世紀後葉）まで連続して焼成されたとし、②有高台碗（碗Ⅰ類）のみが焼成されたとする従来の大洞東期を、底部内面の調整技法から10a型式期と10b型式期とに分離し、いずれも碗Ⅱ類が併焼されたなどの新知見を提示した。第2節では四耳壺・水注などの小形壺瓶類、第3節では窯道具である専用蓋の型式分類を行い、山茶碗類の編年に対応させた。なお「文永三年」の蓋は第7型式期前半に位置付けている。

第3章「中世東濃窯の窯体構造」は、窯体構造の分類と変遷についての研究である。東濃窯の窯体構造は一般的に山茶碗窯と呼ばれるものであるが、第1節は窯体構造に関する研究史で、若尾正成・山内伸浩・岩下英治氏らの研究を紹介している。第2節では、発掘調査報告書に掲載された窯体構造図を対象とし、まず床面傾斜からは、燃烧室と焼成室下方の床面傾斜がほぼ水平で煙道部に平坦面が形成されるA類、燃烧室から分炎柱上端までがほぼ水平で焼成室下方に10度前後の緩傾斜部分がみられるB類、燃烧室がほぼ水平で分炎柱下端から床面傾斜が始まるC類、燃烧室はほぼ水平であるが分炎柱の少し手前から傾斜が始まるD類、燃烧室の水平部分が狭く中央付近から床面傾斜が始まるE類、燃烧室に傾斜を持ち焼成室の床面傾斜はほぼ一定のF類、燃烧室に傾斜を持ち分炎柱脇に昇炎壁を持つG類の7類に分類した。次に床面の平面形は、焼成室中央が最大幅となりそこから煙道部にかけて床面幅が減る「紡錘形」、焼成室下方に最大幅があり煙道部にかけて床面幅がほとんど変化しない「寸胴形」、焼成室下方に最大幅があり煙道部にかけて緩やかに床面幅が減る「倒卵形」に大別した。第3節では時期ごとに検討を加え、第4型式期にはA類、第5a型式期にはB類、第5b～d型式期にはC・D類が主体で一部E類が、第6型式期にはE類、第7型式期にはF類、第8型式期にはG類が登場し、第9型式期以降はG類が主体なるという。次に床面の平面形は、第4～7型式期にかけては「紡錘形」と「寸胴形」が、第8型式期には「倒卵形」が登場、第9型式期には「寸胴形」が、第10型式期には「紡錘形」がなくなり、第9型式期以降は「倒卵形」のみとなることを明らかにした。

第4章「中世東濃窯の分布と群構造」では、窯跡の分布状況から群構造を明らかにすることにより生産者集団の移動について検討を加えたものである。第1節は若尾・山内氏らのこれまでの研究を纏めたもの。第2節では、中世東濃窯の分布範囲を地理的要因から土岐川以北の地域を、①可児市南西、②可児市南部中央、③可児市南東、④多治見市北西、⑤北小木、⑥明和・住吉、⑦高田・小名田、⑧丸石の8地区、土岐川以南の地域を①肥田、②大洞・土岐口、③大畑・下半田川、④城山の4地区、計12地区を設定し、地区ごとに分布状況を概述している。第3節では時期ごとの変遷につ

いて、第3・4型式期は可児市南西地区のみに散在、第5・6型式期には南東方向に増加・拡散し、一部は土岐川を越えて大洞土岐口地区まで拡がり、生産のピークを迎える第7型式期には北小木地区・高田小名田地区・大畑下半田川地区の3カ所に分布が集中する。第8型式期には窯数が減少に転じ、第9型式期には土岐川以南が生産の中心となることから、土岐川以北から以南への生産者集団の移動を証明した。さらに第4節では、中世東濃窯の工人集団数を①各型式の期間、②各時期の窯跡数、③各時期の平均焼成回数、④1型式期において1集団が築窯可能な最大窯数から割り出している。そして時期ごとに各地区の集団数を試算することで、各時期の系統別の集団数や集団単位での移動状況を提示した。なお、前章でみた窯体構造の平面形の「紡錘形」と「寸胴形」は集団の違いを意味し、土岐川以南の分布状況から「倒卵形」は、「紡錘形」の集団から発生した可能性を指摘している。

第5章「中世東濃窯製品の流通」は製品の流通に関する研究である。第1節では、小野木学・岡本直久氏らによる尾張型山茶碗と東濃型山茶碗の出土分布や、流通拠点と流通経路についての研究を紹介している。第2節では、東濃型山茶碗が主体を占める主要流通圏、他類型と量的に拮抗する遺跡および他類型が主体を占め東濃型が客体的に搬入される遺跡を2次流通圏とし、①東濃地域、②中濃地域、③西濃地域、④飛騨地域、⑤尾張東部地域、⑧尾張西部地域、⑨長野県南部地域の9地域に分け、地域ごとに流通状況を概説している。第3節では時期ごとに流通状況を検討し、①第3・4型式期には生産地周辺にあった主要流通圏は、②第5・6型式期には北東方向へ拡大し、③生産のピークである第7型式期には尾張北西部を主要流通圏に加え、④第8型式期以降は縮小傾向にある尾張型の主要流通圏を補完するように流通することを明らかにした。第4節では、拠点集落や生産地との関わりが想定される集落遺跡を分析することにより、東濃型山茶碗の流通圏・流通経路について検討を加え、東山道を主要なルートとして専ら陸路で運送されたと結論付けた。第5節では、美濃国産四耳壺の類型別流通状況と流通経路の検討を加えており、東濃窯産四耳壺は東濃型山茶碗の主要流通圏を中心に流通し、東山道ルートでさらに遠方まで流通したと結論付けた。第6節では、東濃型山茶碗の流通の担い手について拠点集落へは生産者が直接運搬し、そこからは別の運び手によって搬入された可能性を指摘した。また流通圏の一致から古瀬戸系施釉陶器のうち鍋釜類などは、東濃型山茶碗の工人集団によって運搬された可能性を指摘した。

第6章「中世東濃窯の成立と展開」は第5章までの総括である。第1節では、中世東濃窯の生産と流通の6段階を設定した。第1段階（第3・4型式期）は中世東濃窯の成立期で、可児市南西地区を中心に生産地周辺の需要を満たす程度の小規模生産であったが、第2段階（第5・6型式期）は、窯数が増加し分布範囲も南東方向に拡大し、加えて小形壺瓶類の生産が行われる。これに伴い流通圏は拡大し、東濃地域を中心に中濃・飛騨南端部・信濃南西部の一部にかけて流通する。第3段階（第7型式期）は土岐川以南にも分布が拡がり生産のピークを迎えるとともに、製品は尾張西部にも流通する。第4段階（第8・9型式期）には土岐川以北で生産規模が縮小するが、主要流通圏には大きな変化はみられず、前段階と同様、尾張型の主要流通圏が縮小した範囲には東濃型が流通する。第5段階（第10・11a型式期）は、さらに生産規模が縮

小し、尾張型の主要流通圏が消失することで、ほぼ全ての地域に東濃型が独占的に流通する。第6段階（第11b型式期）には山茶碗類が供膳具としての機能を失い灯明皿となり、流通圏は中濃・尾張北部を中心に限定的に流通し、この段階をもって山茶碗専焼窯は終焉を迎えるとした。第2節は、中世東濃窯の成立について検討したもので、中世東濃窯第1段階の分布域は、古代東濃窯の末期灰釉陶器生産とは直接連続せず、第3型式の山茶碗類の形状の類似性および13世紀に尾北窯が廃絶することから、猿投窯ではなく尾北窯からの生産者移動によって成立したという。第3節は、中世東濃窯の廃絶前後の状況について検討したもので、瀬戸美濃大窯に通有の昇炎壁が東濃型山茶碗窯のG3類と共通すること、11b型式期の東濃型山茶碗は、瀬戸美濃大窯における無釉の灯明皿へ形態的に連続することなどから、東濃窯の山茶碗生産者は廃絶後、15世紀末に成立する大窯生産に吸収された可能性が高いとした。第4節は、東濃窯の山茶碗生産者の性格について検討したもので、領主層からの管掌・干渉をほとんど受けず、荘園配置に関係なく原料や消費地の需要などによって移動しながら窯業生産を行っていたが、小形壺瓶類の生産背景については、文献にみられる荘園との関係から、有力者の受容に応じて必要に応じて製品の注文が行われたとする。第5節では、施釉陶器を生産した瀬戸窯、大形壺甕類を生産した常滑窯など、尾張国側の窯業地と段階ごとに生産内容と流通状況を整理している。山茶碗類（供膳具）を量産した東濃窯は、常に在地の需要に応え続けた地域密着型の窯業地と評価している。

3. 論文の評価と今後の課題

(1) 論文の評価

本学位請求論文は中世東濃窯における考古学的研究である。本論文の根拠となる考古資料は、ほとんどが発掘調査によって出土したものである。このうち遺物については、山本氏が各自治体の収蔵資料を再実測したもので、遺構・遺跡については各発掘調査報告書から収集したものである。山本氏はそれらの資料を分類・分析することにより、中世東濃窯に関する多くの図表を作成しており、それらは各章に適切に配置されている。また第1章をはじめ各章の第1節には、先行研究がまとめられており、中世東濃窯における従来の研究について見識の深さを示している。

第2章では最新の詳細な編年研究を提示し、これは第3章以降の考察の基礎となっている。第3章の窯体構造や第4章の分布と群構造は窯業地全体を俯瞰した研究で、これによって中世東濃窯の動態が初めて明確にされたといえる。また、窯体の平面形の相違は生産者集団の違いを反映するという新見解を提示した。

第5章では、東濃型山茶碗の主要流通圏・2次流通圏は非常に狭く、時期的な変化も少ないこと、第6型式期までは尾張型山茶碗と競合関係にあるが、第7型式期以降は尾張型山茶碗とは排他的に分布することなどを明らかにした。

以上、山本氏の本学位請求論文は、考古学的手法による中世東濃窯研究の最先端をいく論文である。これまで編年研究に終始する傾向の強い窯業史研究において、窯体構造、窯跡の分布状況、製品の流通状況から、生産者集団の実像に迫らんとする積極的な論文であると評価できる。

(2) 今後の課題

口述試験では、次のような研究上の課題が指摘された。

第2章の専用蓋の分類と編年については、①窯跡における専用蓋と山茶碗類との共伴関係が提示されていないこと、②「文永三年」銘の専用蓋は、法量が大きく調整も丁寧であることから通常の専用蓋とは異なるとし、分類から除外したことにある。慎重に分析する必要がある。

第3章の窯体構造の分類と変遷については、先行研究との関係に問題が残る。例えば若尾氏が提唱した「プレ大窯」は、G類の範疇に含まれ第8型式期まで遡ると思われるが、後の瀬戸美濃大窯に直接連続するか否か、未解決の課題として残されている。

第4章の分布と群構造については、第7型式期までは生産拡大に伴い山茶碗生産者は移動しつつ生産したことを明らかにしたが、第8型式期以降は生産の減少に伴い4～5地区に集約される傾向が認められ、山茶碗生産者の各地区への定着が始まった可能性があり重要な研究課題である。なお集団数の算出は非常に興味深い試みではあるが、①複数型式（時期）以上に跨って操業している窯は、それぞれの時期にカウントしていること、②1基あたりの焼成回数を時期ごとに求めているが、焼成回数のデータ自体が少ないため合理性を欠くことなど、算出方法については若干疑問が残る。

第5章の東濃窯製品の流通については、非常に興味深い知見を得ているが、第3章と同様、先行研究との関係に問題が残る。本論文の新知見と研究史との関係を明示すべきである。なお、考古学的研究における流通論には、正確な分布図と詳細な出土地名表の作成は不可欠であろう。

以上のように、本論文では、多くの考古資料を集成することにより図表を作成し、その解釈を積極的に試みたもので、本論文には残された研究課題も多いが、これまで未解明であった中世東濃窯の諸問題を解明し、随所で新見解を提示している。山本氏が描く中世東濃窯の歴史像については、今後さまざまな議論を呼ぶと推測されるが、そのこと自体が今後の窯業史研究の進展に大いに寄与するものと確信する。

4. 口述試験および語学試験の結果

(1) 口述試験

口述試験は、主査・副査4名の審査員が参加して、令和2年8月3日（月）午後1時から3時にかけて質疑応答が行われた。山本智子氏は、各審査委員の質疑に対して的確に回答し、各審査委員を十分に納得させるに足りる理論的根拠を明示した。審査の結果、合格と判定された。

(2) 語学試験

山本智子氏は、平成26年5月28日に行われた本学大学院の博士候補者試験に合格している。

5. 審査結果

以上のように、山本智子氏が提出した学位請求論文は、愛知学院大学学位規則第3条第2項により、審査委員一同、大学院文学研究科の博士（文学）を授与するに相応しいと判断し、合格と判定した。

令和2年9月9日

主 査 愛知学院大学教授 藤澤良祐

副 査 愛知学院大学教授 福島金治

副 査 愛知学院大学准教授 長井謙治

副 査 名古屋大学大学院准教授 梶原義実